

8月末から、庭に次々と黄色い小さな可憐な花を咲かせている草花があります。前回、紹介したタカサゴユリと同じく、彼らもまた、わが家への闖入者でした。しばらく前、どこからやって来たのか、家の東側の歩道と敷地のわずかな隙間に芽生え、小さな花を咲かせたのが最初でした。

細い茎の先端に咲く花は二日ほどで萎んでしまうのですが、そこに三つ眼のカマキリの頭のような形の実をつけます。その部分が緑から褐色になると、三つの「眼」に真っ黒に光る種が折り重なるように結実します。これを庭の白梅の根もとにパラリと蒔いておきましたら、いつしか芽を出し、花を咲かせ、少しずつ増え、この時期、住人を楽しませてくれるようになりました。

花の名前はゼフィランサス・シトリーナ (*Zephyranthes citrina*)。ゼフィランサスはこの種の草花の総称、シトリーナが黄色い花の色を指します。白い花を咲かせる種類はゼフィランサス・キャンディーダ (*Z. candida*)。これには「玉すだれ」という素敵な和名が付けられています。そこで、シトリーナのほうは自己流に「黄花玉すだれ」と呼んでいます。

これらの原産地は南米のラプラタ川流域、雨後に花を咲かせることから、レイン・リリー「雨百合」とも呼ばれるそうです。「百合」といっても、背丈は高くても30cmに届きません。

玉すだれも「黄花玉すだれ」も、花は上向き、花弁は反り返りませんが、同じ仲間に、比較的大きな桃色の花を咲かせ、花弁が外側に反る種類があります。その名はゼフィランサス・キャリネイト (*Z. carinate*)。キャリネイトとは「反りのある」という意味です(船の竜骨を表すラテン語 *carina* に由来)。その昔、ドイツ留学中にお世話になった老婦人がこの花をサフランと呼び、鉢植えで楽しんでいました。これもまた、いつの間にか、わが家の住人になりました。和名は、不名誉なことに、「サフランもどき」です。

さて、本物のサフランですが、サフランと聞くと「荒野は……サフランのように花咲き」という聖句(イザヤ書 31:1、口語訳)を連想される方もいらっしゃるでしょう。1974年の夏、私は初めてイスラエルの地を踏み、スプリンクラーで撒水された収穫後の青々としたオレンジ畑を目のあたりにしました。そのとき思い浮べたのがこの聖句でした。もっとも、その後、南のネゲブ砂漠付近までを潤すイスラエルの灌漑施設は、ガリラヤ湖からの大量取水によること、そのためにガリラヤ湖から死海に流れるヨルダン川の水量が激減して一部の生態系が破壊されたこと、死海は湖水面が低下し、南北二つの湖に分かれてしまったことなど、豊かな果樹園だけを見てはわからない裏面があ



ることを知りました。

ところで、そのイザヤ書 35：1b からサフランが姿を消しそうなのです。邦訳聖書でその部分を見比べてみましょう。

<サフラン>

文語訳：砂漠はよろこびて番紅（さふらん）のごとく咲輝かん。

口語訳：さばくは喜びて花咲き、さふらんのように、

新改訳：荒地は喜び、サフランのように花を咲かせる。（新改訳 2017 もほぼ同じ）

<ゆり>

関根正雄訳：砂漠は喜び、花咲き乱れ、百合のように、……

岩波版：荒地は喜び、百合のように花咲き乱れ、

<野ばら>

新共同訳：砂漠よ、喜び、花を咲かせよ、野ばらの花を一面に咲かせよ。

協会共同訳：砂漠は歓喜の声を上げ、野ばらのように花開く。

<水仙>

フランシスコ会訳：荒れ地は喜び、花を咲かせる。水仙のように……

新改訳と新改訳 2017 だけがサフランを残し、新共同訳と協会共同訳では「野ばら」に替わりました。理由は、原語ハヴァツェレットが「シャロンのばら」（雅歌 2：1）の「ばら」だからです。関根正雄訳の「百合」は、70 人訳ギリシア語聖書のクリノン「百合」をふまえた訳（岩波版はそれを踏襲）。フランシスコ会訳は「水仙」です。

雅歌 2：1 のほうを見ますと、「シャロンのばら」という表現が日本語として定着したからでしょうか、同じハヴァツェレットが関根正雄訳でも「ばら」、新改訳 2017 でさえも新改訳の「サフラン」を「のばら」に替えてしまいました。フランシスコ会訳のみが「水仙」と訳し、イザヤ書と合わせています。

前号に、ハヴァツェレットはショシャーン「白百合」の別名であろう、という植物学者の見解を紹介しましたところ、一緒にヘブライ語聖書を学ぶ方から、「シャロンのばら」という訳語の由来を尋ねられました。調べてみますと、ハヴァツェレットを「ばら」と解釈したのは、中世ユダヤ教の高名な聖書解釈者でもあった A・イブン・エズラ（1090 年頃～1165 年頃）のようです。

旧約聖書には、もう一箇所、サフランが登場する箇所があります。雅歌 4：14 です。ここには、旧約聖書のほかには用いられないカルコム（karköm）という単語が使われています。これを「サフラン」と訳した最初は 70 人訳ギリシア語聖書。邦訳聖書もすべて「サフラン」です。ところが、このヘブライ語と関連するアラビア語クルクム（kurkum）はインド産ウコン（ターメリック）を指します。しかも、雅歌では、この単語の前後にインド産の香料ナルドやシナモンが並んでいます。そこで、カルコムは「ターメリック」と訳すべし、との主張がなされます。

サフランか、野ばらか、百合か。サフランか、ターメリックか。聖書の翻訳には、植物学者の協力も必要なのですね。もっとも、サフランもターメリックも食べ物を色づける点では共通します。サフランの場合は、赤いめしべを乾燥させて使います。

そこで思い起こすのは、ドイツ留学時代、親しくしたヨルダン人サブリ・アッバディ氏から幾度となく食事に招かれ、サフラン・ライスを振る舞われたことです。たいていは、細かく刻んだ山ほどのモロヘイア（アラビア語でムルヒア）と一緒に仔牛の肉をじっくり煮込み、レモン果汁をたっぷり絞り込んだスープをサフラン・ライスにかけていただきました。イスラム教徒のアッバディ氏は豚肉を食べません。私のお返しは、決まって、牛肉と人参とマッシュルームの炊き込みご飯でした。



アッバディ氏が振る舞ってくれた特別のご馳走は、オリーブ油で炒めたアーモンドをまぶしたサフラン・ライスに、牧羊民が作る石のように硬い羊のチーズを削って、羊肉と一緒に煮込んでできる白濁スープをかけたマンサフという料理でした。「レストランで出されるマンサフは、ヨーグルトを使うので、本物ではないからな」とは、そのときの彼の忠告。私のほうは、これが「あなたは仔山羊をその母の乳で煮てはならない」（出エジプト記 23:19）というモーセ律法の背景ではなかったか、と想像したことでした。

今回は、最後に、たっぷりと読書の楽しみを味わった本を一冊、紹介させていただきます。敬愛するドイツ文学者の小塩節先生から頂戴した『随想 森鷗外』（青娥書房）です。

文学にはいたって疎い私ですが、研究者仲間とともに津和野の乙女峠を訪れた5年ほど前から、鷗外がキリスト教をどのように受けとめていたのか、気にかかっています。津和野藩の御典医の家系に生まれた鷗外は、少年時代、津和野で起こったキリシタン迫害を生々しい出来事として見聞きしていたはずなのに、と思ったからでした。

明治維新の前年、一斉に摘発された長崎・浦上村の潜伏キリシタン3300人余は、明治になってから、名古屋以西の各藩に配流され、津和野藩には指導者を含む数十人があずけられました。彼らは、キリシタン禁令の高札が撤廃される1874年（明6）まで、廃寺に押し込められ、拷問を受け、殉教者を出していたのです。極寒の戸外に放置された三尺牢（1辺3尺の木枠）のなかで命尽きてゆく青年安太郎には、聖母マリヤが現れた、と伝えられます。鷗外が10歳前後のことでした。

その鷗外は、長じてヨーロッパ世界とその文化に触れ、数々の優れた小説を書き残しながら、聖書とキリスト教に触れようとはしなかった。若き軍医としてベルリンに留学していたときには、こっそり神学部の授業に出ていたにもかかわらず（『かのように』）。鷗外は、いったい、キリスト教をどのように受けとめていたのだろうか。

『随想 森鷗外』は私のそんな疑問に答えてくれるかのような内容でした。著者の小塩先生は、鷗外の自伝的感想を綴った『妄想』に二度繰り返される「多くの師に逢ったが、一人の主（しゅ）には逢わなかった」という感懐から、キリスト教について沈黙し続けた鷗外の屈折した心のひだへと、読者を誘ってゆかれます。ベルリンから日本に呼び寄せ（!）ながら、一ヶ月余りで送り返し、二度と逢うことのなかった若き日の恋人エリーゼ・ヴィーゲルトへの想いさえも、鷗外は自分の心のなかに封印し続けました。

そこに近代日本とキリスト教の関係を重ねてしまうのは、小塩節先生、私の読み込みすぎでしょうか。

(2020.9.15 記)